

まちを舞台に芸術と文化を編む「ACKT」の紙面プログラム

# OZINE

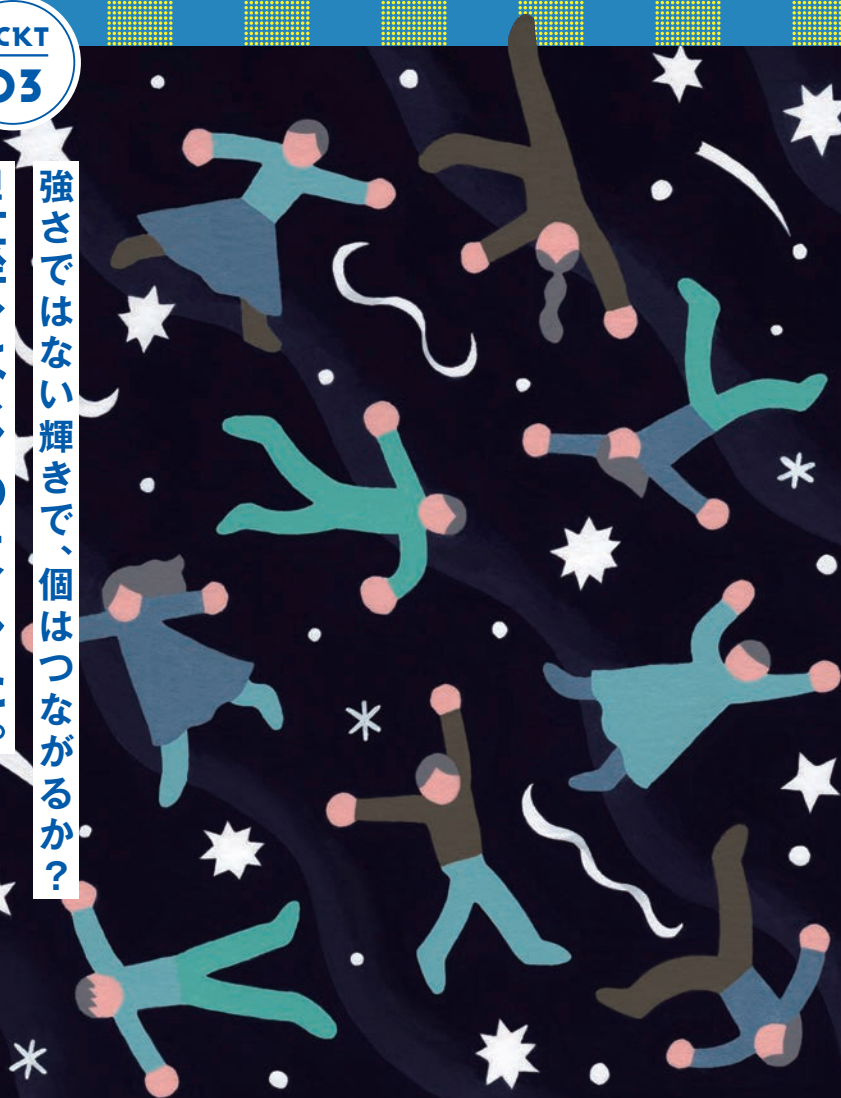
- エンジン -

ACKT

03

星座、はじめました。

強さではない輝きで、個はつながるか？



まちを舞台に芸術と文化を編む「ACKT」の紙面プログラム

# OZINE

- エンジン -

- 04 みんなで星座をつくるには? / コラム【星座創造史：星座が作られた歴史】  
文=関口太樹
- 06 華僑・華人がつなぐ星座とは  
日本華僑華人学会の三尾裕子会長に聞く、かれらのネットワークについて  
文=天野陽日
- 07 「船遊びみづは」から見るトウキョウシティ  
文=石本千代乃
- 08 大学と商店街がつくりだす星座とは 名古屋造形大学「マイクロデザインセンター」  
文=加藤健介 構成=加藤優
- 09 エンジンルーム 振り返り会議 ～星座のはじめかたを考える～  
文=山本穂乃
- 10 編集後記  
文=田尾圭一郎
  
- 11 ACKT's ACTION  
文=加藤健介
- 12 国立高校「私たち国高新聞部」
- 13 堀道広「たまたまブラブラ散歩」
- 14 「CAST」vol.4 田尾圭一郎(田尾企画 編集室 代表) / OZINE 編集長  
文=滝原洸太
- 15 「LAND」vol.4 HOUSEHOLD  
文=田尾圭一郎 構成=さつま瑠璃



# 星座、はじめました。

多様な人と文化のプラットフォームづくりを目指す「ACKT」は、緑地活用を通じた交流やアートイベント、お金でなく価値観を授受するお店など、東京都国立市を中心に様々なプロジェクトを進めてきました。

活動を通して様々な考えにふれながら思うのは、一人ひとりが自分らしさを考えながら誰かと意見交換したり一緒にいたりできる、個性と連帯のプラットフォームについて。意見がぶつかってケンカ別れにならずに、お互いを認め合いむしろ多様さという、よりふくよかな交流をつくるにはどうしたらよいのでしょうか。

そんなときに気になったのが、星と星座のことでした。どの星も強く輝きながら、何光年も離れたまた別の星とつながって、大きな絵や物語を描いています。私たちは星座のように、自分とはちがう誰かとつながり、優劣ではない多様な交流を編むことができないでしょうか。星座のはじめかたをいま、考えます。

# みんなで星座をつくるには？

そもそも星座っていつ頃にできたのだろうか。どうしてつくられたのだろうか。まずは宇宙について詳しい方に話を聞いてみよう。星座の成り立ちと国立天文台の活動について、国立天文台・内藤誠一郎さんにお話を聞いた。



聞き手・文＝関口大樹



話し手＝内藤誠一郎

## 天球の領域を分割する星座

**関口** 星座はいつ頃にできたのでしょうか？また、現在はどんな研究が進んでいるのですか？

**内藤** 私たちは現在、ギリシャ・ローマ時代に天文学者がまとめた星座をベースにした世界共通の星座を使用しています。国際化する以前は、時代や地域毎に星座が作られていて、今よりも多様性があったのではないかと思えます。そうした文化の研究は文化人類学や歴史学として研究が続いています。

**関口** なぜ星座を作って他人と共有していたのでしょうか？

**内藤** 古代の人々にとって星座は暦としての実用的な役割を持っていました。星座は時間や季節を知るためのカレンダーのような役割を果たし、また惑星や月、太陽の動きを記録するための座標としての役割も果たしています。



▲国立天文台 第一赤道儀室

ます。また、古代では星を読むことが政治と結びついていました。天変地異や地上で不吉なことが起こったときに、過去に似た事例はないか星を参照して、今の状況がよいか悪いかを判断したことも星座の成り立ちには不可欠でした。現代の天文学において星座は「天球を分割した領域」を指し、定められた座標系において経度と緯度の範囲で区切った領域を〇〇座と呼ぶことで定義しています。国際天文学連合という学会



## コラム【星座創造史：星座が作られた歴史】

私たちが見る星座はどのように作られてきたのでしょうか。その生成には「占星術」が大きく関わっています。まだ科学的な知見の乏しい古代では、地上で起こったことを星の動きと関係づける「占星術」によって星座が形成されてきたと言います。「天変地異」という言葉のある通り、人の手の及ばない天の異変と地上の出来事と関係づけ、法則性を読み取ろうとしました。

星座の役割はまず「天下国家の占う」ことでした。星の変化や法則性を知ることによって人々を治めようという動きから星を読む行為が始まりました。そうした動きが生まれたのは、古代の中国やバビロニアの文明などです。

文明同士の衝突で争いが絶えない時代、集団を守るために少数が多くの人民の動き方を司っていた時代です。敵の襲来や飢饉などの厄災を記録するために星を記録することが始まりました。この占星術の知識は国を動かすための重要な機密事項でした。そうして星を観測するなかで、占星術には星の法則性・周期性を読み取ることと星と人の運命を結びつける要素が形成されていきます。記録のために惑星には神々の名が付けられ、その惑星の通り道である黄道での位置を示すために十二星座が設けられました。文明が進み「占星術」は国のためだけでなく「庶民の個人的なことを占う」ものになっていきます。こうした名残が、誕生月と星座を結びつける星座となっていくのです。

参考：『占星術-その科学史上の位置』中山茂、1993年、朝日新聞社



▲国立天文台の屈折望遠鏡

## INFORMATION

国立天文台  
東京都三鷹市大沢2-21-1  
ウェブサイト：<https://www.nao.ac.jp/>



で、これから天文学では共通に定義したものを使おうと学術的に決められました。

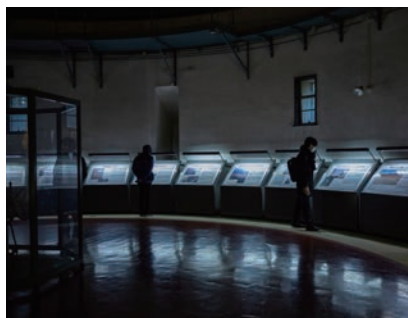
**関口** 星のつながり方ではないですね。

**内藤** はい、学術的に定義されているのは天球の区切り方だけです。天文学的には領域の意味しかありません。そういう意味では星のつながり方には定義がないので、誰でも星座をつくることができます。

## 市民と探究する天文学

**関口** 現代の天文学は銀河の探究が主なテーマなのですが。

**内藤** 現代天文学には実に様々なテーマがありますが、銀河の研究も一つの大きな分野です。銀河は100億年ものスパンで進化してきたと考えられるので、ひとつの銀河を追っていくのは人間の寿命では難しい。そのため、観測できるたくさん銀河を分類し系統立てることが現在の天文学の作業と言えます。国立天文台



▲国立天文台 内部

ではGALAXY CRUISE（※）というプロジェクトで市民のみなさまのご参加のもと、銀河の分類にご協力いただいています。

**関口** GALAXY CRUISEを調べるなかで市民天文学という言葉が初めて知りました。国立天文台が市民天文学の活動を始めたのはなぜですか？

**内藤** 国立天文台のこれから考えたとき、より双方向のコミュニケーションを重視する必要があり、そこにある指摘がありました。そこに

市民科学の考え方を取り入れてきたのがいまのかたちです。天文学はアマチュアの方々の活動も盛んです。そうした市民の方々の力をお借りし、研究機関のデータを楽しみながら分析してもらおうと考えました。

**関口** GALAXY CRUISEを僕もプレイしてみたのですが、画面のデザインがすごくわかりやすかったです。

**内藤** ありがとうございます。開発にあたって、継続的に遊んでもらえるようにゲーミフィケーションを意識して設計しています。ランキングやチュートリアルを入れて、学術貢献という側面だけでなく、ウェブ上の体験として楽しいものにするために試行錯誤しましたね。

**関口** どのような方が参加しているのですか。

**内藤** お子さんがかきつけ始めた女性の方やご高齢の方など、様々な方に遊んでいただけてま

## After Interview

つながりすぎず、つながるために

僕は星を見るのが好きで、澄んだ冬の空を見上げて星を眺めます。夜空に点在する星と同じように、星を見上げている人も、この地上にたくさんいるのでしょう。その中には天文を専門的に好きな方もいれば、ただ眺めるのが好きという方もいます。それぞれの光の強さに応じて「過度につながりすぎない」ということが、僕たちがゆるやかな星座をつくるためのヒントになるのではないかと思います。

※国立天文台が推進する市民と研究者が協力して銀河を巡る市民天文学のプロジェクト。



# 華僑・華人がつなぐ星座とは

日本華僑華人学会の三尾裕子会長に聞く、かれらのネットワークについて

「星座」の連帯や協働という部分について、より広い視点から見た国際的な星座のつながりはあるのだろうか。そこで今回、日本の華僑・華人研究の発展とその成果の社会への伝達を目的としている日本華僑華人学会の現会長を務めている三尾裕子さんに、華僑・華人のネットワークについてお話を伺った。

## 華僑・華人の歴史

中国大陸から海外に移住した人たちのことを「華僑」と呼びます。華僑の「華」は中国を意味し、「僑」は仮住まいを意味します。華僑は一定期間海外に住んだら中国に帰ることが前提とされていました。しかし移住先で経済活動をするために現地国籍を取ることが求められたり、中国本土での文化大革命などの社会変動が激しかったりしたことにより、現地国籍を取って定住することを選択する人々が増えてきました。そうした人々のことは仮住まいの「僑」を取り「華人」と呼ぶようになったそうです。

### 連鎖移民というつながり

ある人が海外へ出て行った、その人のツテを頼って次の人が出ていく移住形態のことを「連鎖移民」と言います。同じ方言や故郷、苗字などの共通のものがあるとその人のツテを頼って出ていくのです。それから海外に出たあと「アッセンブリーホール(会館)」などの集会所や互助組織をつくることで集まり、仕事や住居を世話するなどお互いの面倒をみあうことで、移住先での生活の基盤を築いていきました。

この自分と同じ要素を見つけてつながるといふ発想は「トン・イズム」と呼ばれています。

### 社会・環境によるつながり

「海外で生活していかなければいけない」となったときに、仲間を見つけて生活するという

術は中国人でなくてもあり得ます。かれらの民族性というよりも、当時の社会的・環境的要因でこのような組織をつくらざるを得なかったのではないかと。しかし華僑を多く送り出した中国の福建省や広東省などの地域では、大きな親族組織ができることが理想的だという観念は存在すると三尾さんはおっしゃいます。親族組織の大きさは一族のステータスにもなるそうです。

### 実はオープンなネットワーク

文化人類学者である陳天璽さんは「華僑のネットワークはオープンであり、社会と関わり合っている」と、ご自身の本の中で述べています。華僑は内部ネットワークでビジネスをして栄えていくというイメージがありますが、実際には華僑のなかだけで閉じているわけではなく、見ず知らずの土地で生きる

ため、ときには現地の人々々の力を借りなければなりません。

三尾さんはかれらを「華僑・華人」という特殊な存在としてではなく、移民の生き方の一例として見ることで、かれらのネットワークをつくる努力から学べることもあるのではないかとおっしゃいます。私自身、中国の歴史の長さや成功者の活動がよく目に入ったり、中華街の存在や華僑・華人という名前に引張られることで、かれらを特別視してしまっていたということに気づかされました。インタビュー中に三尾さんがおっしゃった、海外で生活するという環境がかれらを華僑・華人に「していく」といふ言葉が特に印象に残っています。



## INFORMATION

日本華僑華人学会  
ウェブサイト:  
<https://www.jssco.org/>

### After Interview

#### かたちを変え続ける星座

華僑・華人のリサーチを進めるにあたり「老華僑」と「新華僑」のネットワークのちがいに興味がありました。新華僑とは、中国の改革开放以降に海外に出た華僑のことを指します。新華僑と呼ばれるかれらは名前や方言、故郷などの「トン・イズム」のもとに集まり、つながっていた老華僑の時代から、インターネットを利用したつながり方へ移行していったようです。新たな「インターネット」という存在がかれらのつくり出す星座のかたちを変えるきっかけとなったのです。そんなかれらの移り変わりからも読み取れるように、人々は常に外部の要素を取り入れながら星座のかたちを変化させ続け、連帯・協働を行っているのではないのでしょうか。

# 「舟遊びみづは」から見る トウキョウシティ



網目のようにつながった川や水路を「ふね」が往来し人や物をまちからまちまで運び、暮らしの賑わいをつくります。そんな江戸時代からのこる河川文化の伝統は舟遊びをとおして現在に継承されている。多くの建物や人々が集結し、まるで星雲のようなまち、東京。まちを星座として捉えたら、これまでの文化や私たち一人ひとり星と言えのかもしれない。そこで、東京の水路をオリジナルコースで巡る「舟遊びみづは」の代表である佐藤美穂さんと船長でご主人の勉さんにお話しを伺った。



「舟遊びみづは」は2013年の創業以来、日本橋をはじめとする明治から昭和初期の橋に映えるレトロモダンな舟で東京の水路を巡り「舟遊び」文化を再現。江戸から続く工芸の職人技を随所に配した数寄屋風の佇まいで「水都・東京」の魅力を現代に伝えています。

## 外から見た「江戸の粋」

**石本** みづはを始めたきっかけを教えてください。

**美穂** 会社員時代に海外赴任でアメリカに住んでいたことがあり、そのときに誕生してわずか200余年の若い国だからこそその活力を感じていました。それと同時に、ヨーロッパをはじめとした諸国が紡いできた歴史的な財産にも目を向けるようになりました。遠く離れた土地から日本を見ると江戸時代の都市計画など

の素晴らしさに改めて気づき、いつか「江戸の粋」みたいなことを伝えられたら良いなと考え始めたんです。帰国してしばらく経ったころ、江戸の文化を伝える仕事をやってみようと決心し、いろいろと考えた末に「小舟」の仕事を選びました。ふねや川に関する事業は完全に未経験の分野だったのでハードルが高いと思ったのですが、手探りで準備を始めて3年目で開業しました。

## 舟の視点から見た東京

**石本** 「東都水路縦横之図」を見て、知らない川がたくさんあることに驚きました。

**美穂** 江戸時代は車がないので大きくて重いものを運ぼうと思えば、うねや運ばないと運べない、水路が今でいう道路の代わりでした。東京は特に東側は水路でつな

がっているんです。そして東京の河川は水害に対する備えもあり、ふねで渡れる場所は堤防が高かったりもします。私たちが小さいふねに乗ったとき、地面よりも低いところからモノを見ているんですよ。だから意外と気づかないことって多いんです。

**石本** 水上ならではの視点ですね。

**美穂** そうですね。内部河川の狭いところを移動したり水門の出入りができるといったのも小舟ならではのかなと思います。またふねから見ると土木構造物は橋なんですね、橋にもいろいろな種類があるので、歴史や防災の観点から見ると面白いですね。  
**勉** 水上から陸へ視点を戻すと、新橋や京橋など今は流れていない川にかかっていた橋がたくさんあることにも気がきますよ。



▲美穂さんのお父上が手描きした「東都水路縦横之図」

## After Interview

水上のススメ『ゆっくり焼きついていく、記憶』

長崎の小さな島で生まれ育った私にとってふねや海はとても身近で、インタビューの途中、ふと20年くらい前の記憶が蘇った。当時、帰省をするときのルートといえば羽田発のフライトで福岡まで行き市内で用事を済ませ、博多埠頭から深夜に出港するフェリー。太古に乗って朝方に郷里の島に到着するという旅程を定番にしていた。

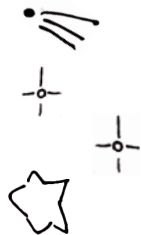
福岡空港から飛行機を使えば片道45分で島には到着できる。でも、私はあえて8時間半かかるこの船旅の時間が好きだった。お気に入りポイントにはたくさんあるけど、いちばんのお目当ては、日の出の

頃に船室の窓から視界に飛び込んでくる「朝焼け」。しずまりかえった早朝に、海上を眺めながらぼーっとする時間はなにより贅沢だ。ゆっくりと時間をかけて移動することで無意識のうちに都会と小さな島の時差を埋めていたのだろう。

潮風を感じながら「ふね」に乗っていると、昔と今の自分が対話をはじめ薄れていた記憶は色濃くなつていく。水上で揺られている時間には、多面的な視点で物事を捉え新たな気づきを与えてくれる発見と、過去の歴史や記憶を現代と接続してくれる面白さが詰まっている。

## INFORMATION

舟遊びみづは  
(株式会社フローティングライフ)  
ウェブサイト: <https://www.funaasobi-mizuha.jp/>



## 大学と商店街がつくりだす星座とは 名古屋造形大学「マイクロデザインセンター」



近くにある商店街の小さな悩みや相談に対し学生がデザインで応える名古屋造形大学で行われる授業「マイクロデザインセンター」のあり方に、今号のテーマとの符合を感じ、2024年12月下旬、地域建築領域の江津匡士教授とマイクロデザインセンターを受講する学生を訪ねた。

### 小さな課題を拾い上げる

江津匡士こづつた氏は、ACKTのホームである東京都国立市を軸に活躍していたデザイナー。妻の茶谷悦花ちやが氏と生み出した国立市のキャラクター・くにニャン、市内唯一の銭湯や旧国立駅舎のロゴなど、国立市民の暮らしに根ざしたデザインワークを手掛けてきた。市内のコミュニティスペース国立本店にも在籍し、アーティストや市民らとの協働によるアートプロジェクト等にも深く関わっている。

名古屋造形大学に所属して以降は、活動の中心も名古屋にシフト。2021年、キャンパスが愛知県小牧市から名古屋市への移転期間に入ってから、新キャンパスのある名城柳原地区との関係性に着目しはじめた。

新型コロナウイルスへの警戒が大きかったこの頃、芸術活動が担うことのできる「対話」に着目したプロジェクトがスタートし、移転予定地界隈でリサーチ活動を行った。これをきっかけに、近隣の柳原通商店街とお祭りイベントを共同開催。商店街とのつながりが育まれていった。

マイクロデザインセンターは、領域(学部)の枠を超えたプロジェクト授業というかたちで、2023年に発足。発案は、同じく地域建築領域の建築家・辻琢磨氏だ。商店からの「小さな」悩みや相談が寄

▼居酒屋「いわむら」の店主と話す江津さん



せられ、学生が応える。ロゴや看板を制作したり、オリジナルグッズや什器を制作したり。学



▲商店街の空き店舗で行う授業の様子



▲学生が制作したうつわのひとつ

生の多くが、この取り組みで初めて商店街との関わりを持ち始めている。

訪問した日は、学生が制作したうつわを居酒屋「いわむら」に納品する日だった。当初はお店のシャッターに絵を施すという提案をしていたが、話をしているなかで店主がぼろりと「おかずを盛り付けてカウンターに出せる、30センチくらいの大皿があったらいいんだよね」とこぼした。学生たちにとって、陶芸は専門外だったが、学内でサポートを受けながらチーム4名で計5皿のうつわを完成させた。店主は「すごくいいね!」と喜び、早速その日の営業から使い始めていた。

受講する学生の性質や専門も多種多様。ある学生は「内向的で人と関わるのが苦手だったけど、マイクロデザインセンターの取り組みを通して人生が面白い意味で変わった気がする」と明るい表情で話した。プロジェクトでは複数人のチームを

組み、一人ひとりの違いがいい面でも悪い面でも影響しあう。商店街の多様な店主との関わりも、大学の授業だけでは得られない学びの機会になる。「最初は怖い印象があった店主が、話すとともに優しい人で、プロジェクトで関わりを深めて初めて気付かされることもある」という学生も。

柳原通商店街の中ほどにある空き店舗が、2025年4月頃の拠点としても活用できる場になる。特定の用途に限る店舗ではなく、積極的に何かを売り込む場でもなく、訪れる人との雑談や日常の会話、ちょっとした相談ごとなどから何かが生まれることを期待している。物件のオーナーの意向としても、特定の誰かの占有にはならない場を望んでいる。「ガランドウという呼び方も良いかもしれないですね」なんて話も出ているようだ。

### After Interview

#### 目の前の現実が星を輝かせる

SNSやYouTubeではいつでも広い世界に触れることができる。多様な情報に触れられる一方で、分かりやすく大袈裟で、刺さる「情報に目を奪われてしまう。特にコロナ禍は、行動が制限され、自分のマイクロな世界にマクロな世界が雪崩れ込んできてしまった……その影響を顕著に受けたのが、今回話を伺った学生の世代だと思ふ。

マイクロデザインセンターの視点は正に「小さい」。どうしても遠く広い世界に目が向いてしまう時代に、たまたま大学の近所にある商店街で、リアルな感覚を掴み、経験として吸収している学生の話聞いてみると、そのリアルさや手触り感の大切さに改めて気付かされる。広大な情報の中ではなく、目の前にある小さな現実こそが星を輝かせる。



石本千代乃



ACKTのインターン。普段絵を描いて国内外で発表したり、様々な企画展の制作調整役を担当する。島育。

加藤健介



ACKTの理事。自身が運営する「三画舎」では、まっすぐに輪にプロジェクトを展開している。カメラも持っている。

飛原 涼



ACKTのインターン。最近、国立市に引っ越してきた。市内の散策が最近の趣味。

山本穂乃



ACKTのインターン。国立育ちで普段はIT企業の会社員。週末はもっぱら川か山におり、ライフデザインの修行中。

# エゾアールーム 振り返り会議

## ~星座のはじめかたを考える~

「星と星座とは?」「星はどうやって星座になる?」——それぞれの取材経験を持ち寄り星座のはじめかたについて議論するワークショップを、メンバーで行いました。取材先の光り輝く特徴や個性(星)と、星同士がつながりあってできる関係性(星座)から、どんな共通点が見えてくるのでしょうか。

各人の見てきた星座が企画会議を通してさらにつながり、またちがう星座を示そうとしています。

文=山本穂乃

田尾圭一 郎



「OZINE」編集長。地域や企業によるアートプロジェクトの企画を行う「田尾企画」編集室代表。二児の父。

天野 陽白



ACKTのインターン。美大で学ぶ大学。好きなものは古着とアートブックと豆わめ。

安藤 涼



ACKTの事務局スタッフ。「OZINE」では紙面のデザインなどを担当。最近はずいぶん読書のペースが上がっている。

### それぞれのまちな星座職人

**田尾** 張り出したポストイットから共通点を見出し、書きましよう。こうして見ると「内面について」と「外とのつながりについて」の特徴に大きく分けられる気がしますね。例えば「石本さんの「個(個人)他の生命体、生命体なんでも」というのはどういう意味なんですか?」

**石本** 個は既に星座の一員だと思うんです。どんな生命体も、宇宙↓小さいコミュニティ↓家族↓個のように宇宙という存在に包括されつつも個であることは変わらない。そういう意味で、生命体そのものが輝く星だと思っんです。

**田尾** 「内」と「外」に分けましたが、見えているものをどうつなぐか、見えている領域の中でどう捉えるかといった見方もできそうです。

**天野**さんの「世界を相手にする」という星はどのような位置になるのでしょうか。

**天野** 華僑では、世界経済を相手にしようという志向を持つ方々も最近が多いそうです。内面についてやマインドのようなイ

壁はなくて、そもそも星座として成り立っているということです。

今回のワークショップは、まさに星と星がつながり星座になっていくような時間だったと思います。立場や肩書きの違うメンバーが各取材先について話し合い、つながっていく。星や星座と捉えられ、キラキラと輝いていなければならぬと考えるのが、誰しもが星であり星座であるはずですが。私たちが星は視点を

変えれば光の強さや役割も異なるということを自覚し、周りに目を向けてみることで大事なかもしれない。だから、きつと常に光り輝かなくとも大丈夫。ワークショップを通して、少し肩の力が抜けたような気がします。

イメージですかね。

**田尾** なるほど、世界に相対する視点もあるんですね。加藤さんが書いた「大きいものではなく小さなもの」も面白い視点ですね。

**加藤** 名古屋大学が移転したこと、で交流が生まれた商店街では、大きなプロジェクトとしての見方はなく、小さく捉えてみると、いくらでも学生が関わる余地があるように感じました。その小さな気づきから生まれるトライの積み重ねが、大きいものにつながりそうだな。

**田尾** 光の強さによるものとはちがう星座のはじめ方ができそうですね。そういえば、私の取材先である水見では、まさに点在している「星」を繋ぐような「星座職人」がい

ました。いきなり話しかけてくるまちのフレンドリーなおじさんがまさにそう。

**安藤** 「星座職人」ってキャッチー

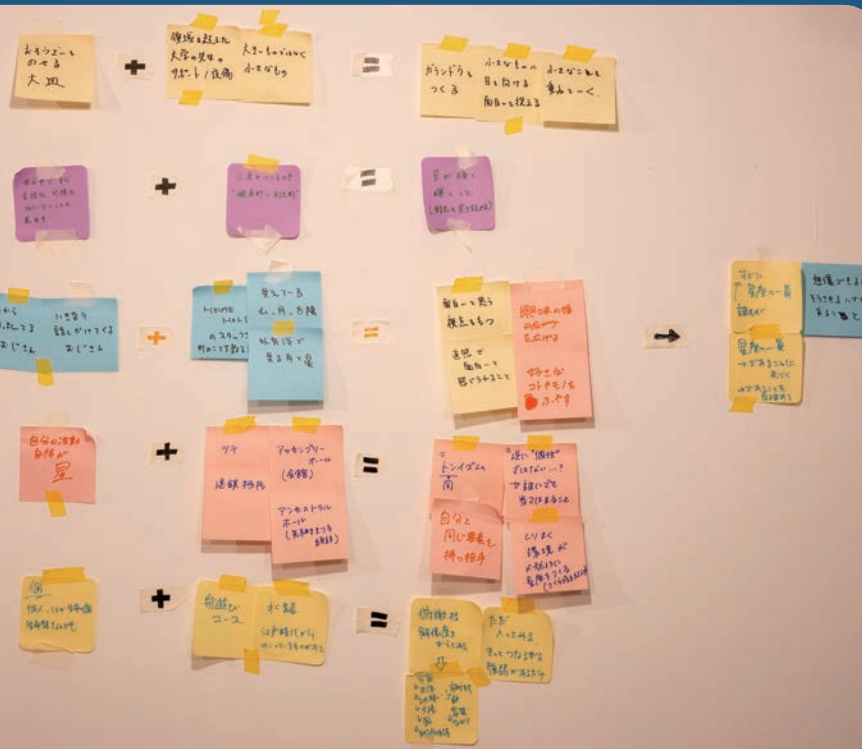
ですごく良いですね。それでいうと加藤さんは、国立市の星座職人と言えそうです。

一同 確かに!

**星が星座になるためには?**

**田尾** これらの星や星座をもとに、取材先ごとの「公式」を作ってみましたが、それぞれの公式から「すでに誰もが星座の一員である」ことが共通点として見えてきます。星や星座を具体的にあげてみると、重なる部分があったり、星だけと星座としても機能していたり、そもそもすべて星座の一部なのかもしれないですね。改めて、取材やワークショップを通して星や星座についてどう思いましたか。

**安藤** 私はみなさんの取材先に同行していたのですが、企画段階で抱いていたイメージとは異なりま



ACKTのインターン。国立育ちで普段はIT企業の会社員。週末はもっぱら川か山におり、ライフデザインの修行中。

# ACKT'S ACTION

2024/10/05~10/20

## KUNITACHI ART CENTER 2024



5年目となるKunitachi Art Centerを2024年10月5日~20日の2週間、国立市内および近辺に点在するアトリエ・ギャラリー・店舗、計18箇所を会場に行いました。

ゲストとともに「地域とアート」について考える5周年記念トーク、ボランティアチームCASTのアテンドで展示会場を巡るツアー、「さえき洋品●」での公開制作プログラム、スタンプラリーなど、新たなプログラムも展開。来場者自らが国立のまちを回遊し、気になる展示や制作風景などを眺め、ときに作家本人とコミュニケーションする。さまざまなプログラムを通じて、このエリアの可能性や魅力に触れる機会をつくっていきました。



編集後記

文=田尾圭一郎

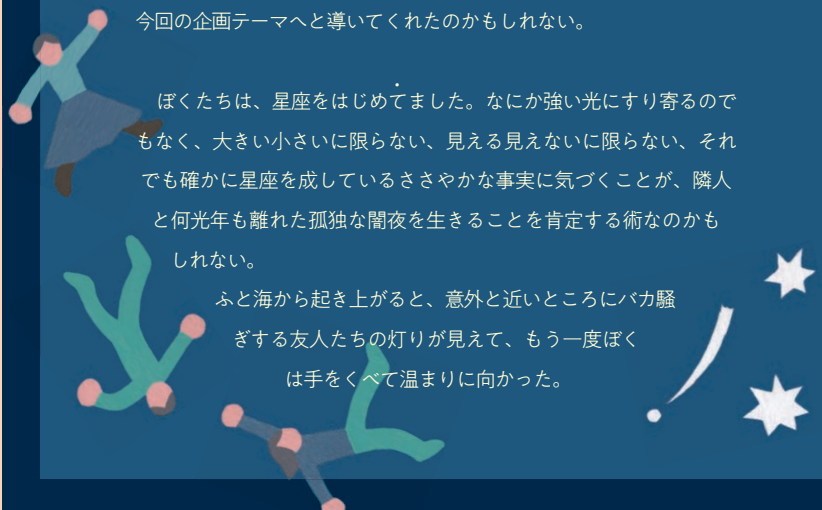
2024年の秋、宮古島を訪れた。同行した友人家族4世帯はぼくにとってほとんどはじめましてだったが、お酒を酌み交わす度に親しくなり、疎外感も感じずに南の海を満喫することができた。最終日の夜には、海岸沿いでBBQをした。ひとしきり食べてくれない話をし尽くしたあと、ぼくはとぼとぼと波音に向かって歩いていき、そのまま大の字になって海に浮かんだ。視界には真っ黒の空に無数に点在する大小の白い点。そしてそれをやさしく包むヴェールのように流れる雲だけが見える。オリオン座や北斗七星といった星座は東京の冬空で見上げるとぼつねんと瞬いてそれはそれは寂寥感を誘うが、ここでは星座の間に間に無数の小さな星がささやいていて、まるでクロスワードパズルのようにいくつもの意味やかたちを示唆していた。

「星座とは(星と星をつないだ線形ではなく)領域を指す」——今回の取材で国立天文台の内藤さんからうかがったお話は数十年生きてきてはじめて知った衝撃で、この宮古島の夜空が思い出された。ぼくらは強い光の星にばかり目が眩むが、そこには見えもしない小さな無数の星がただ確かに在る。あるいはそこに紡がれる意味とは、華僑のトンイズムのように足元のおぼつかない土地の小さな営みにかすかなつながりを見出し連帯することなのかもしれない。

奇しくも号の「〇ZINE」から制作メンバーが増え、普段の仕事ではけっして交われないような人たちの議論を楽しむことができた。BBQのちょうど前日に行われたキックオフ打合せで東京と宮古島をつなぎ彼らと知り合ったこともまた、活動に編まれる星座をゆたかにし今回の企画テーマへと導いてくれたのかもしれない。

ぼくたちは、星座をはじめました。なにか強い光にすり寄るのでもなく、大きい小さいに限らない、見える見えないうに限りなく、それでも確かに星座を成しているささやかな事実気づくことが、隣人と何光年も離れた孤独な闇夜を生きることを肯定する術なのかもしれない。

ふと海から起き上がると、意外と近いところにバカ騒ぎする友人たちの灯りが見えて、もう一度ぼくは手をくべて温まりに向かった。



2024/07/06~

## GREEN GREETINGS



GREEN GREETINGS  
のプログラム詳細はQR  
コードをチェック!



2024年7月から、ACKTの拠点「さえき洋品<sup>てん</sup>」の斜向かいにある公園「谷保駅南口緑地」を活用していくプログラム「GREEN GREETINGS」がスタート。国立市を中心に活動するコミュニティガーデナーの長阪雅子さんにご協力いただき、月に1、2回、樹木や草花などの植物を、集まった人たちと一緒に考えながらお手入れ。「公園の緑」としか見ていなかった空間に、さまざまな種類の植物が存在することに気づき、「この球根はなんですか?」「この木は根っこから抜けるかな」……自然と会話が生まれます。参加者同士の対話を生み、縁をつなぎながら、まちの縁側のような交流拠点として活用していきます。

2024/09/01~

## ただの店



ACKTの拠点「さえき洋品<sup>てん</sup>」を地域に開くプログラム「ただの店」は、お金を介在させずにサービスを提供する、お店らしからぬお店。金銭の授受が発生しないことにより、この場での新たな「価値観の授受」が生まれるのではないかと。そんなことを想像しながら、「ただ」の面白さを見出してくれるお店を募集、7組の仲間と一緒にスタートしました。レコード・CD・カセットを持ち寄り音楽を聴く店、国立に関わる人々の「見てみたい“うそ”の話」の実現を試みる店、これからのまちの遊び場を一緒に考える店など、ジャンルも対象も広いお店それぞれが、これまでになかった地域との接点を生んでくれるかもしれません。



ただの店のプログラム詳細  
はQRコードをチェック!

# 国立高校 トイレ改修計画

今回、高橋が寄稿させていただくこととなった。私は学校で前年度保健委員長を務め、委員会の活動として学校のトイレを改修する計画を練っていた。その軌跡を、この場をお借りしてお伝えしたい。始まりは一年前に筆者が保健委員長になった時だった。委員長として新しく何かに挑戦したいと思うようになった。そのなかで本校における保健分野の課題として「トイレが汚い/臭い」というものがあった。特にこの問題のネックなのは和式がいまだに多く存在する点である。各家庭のトイレは洋式が一般的で、和式の体勢が辛いという生徒は多い。では休み時間にトイレに行くかどうか悩んでいるのか。複数ある和式の個室を避け、洋式の個室が空くのは今か今かと待

ち列を成しているのだ。次の授業に間に合うか不安を抱いてトイレに行くのを躊躇すれば生徒の健康に関わる。さらに、本校は地域の避難場所にも設定されており、緊急時には地域住民の方も使用するトイレとなる。年配の方や障がい者の方が利用するには非常に悪い環境である。筆者はこの問題を解決したいと思いはじめた。まず校内の全てのトイレの問題がある箇所をスマホで撮影し、どのような解決方法があるかを調べレポートにまとめた。また、公立の学校での前例もリサーチした。それを踏まえ、保健委員会内、そしてクラス内でアンケートを実施し、実際にどのような要望があるのかを調査した。その結果を踏まえて校長にトイレ改修を求めた。

その後も何度も校長をはじめとする教員と協議を重ねた。その活動を通して、本校が都の教育委員会に提出する改修要望書の第一希望には、トイレを挙げてくださった。

しかし、計画はなかなか進まなかった。まず多数の都立高校の中で本校の改修が都の資金を多く占められない。また他校で、より緊急度の高い改修が必要であるとそちらが優先になる。仮に本校に資金が提供されても、トイレのような慢性的な課題よりも雨漏りなどの緊急性の高い課題に優先的に資金が使われ、なかなかトイレ問題に着手されない。そのため今年度、来年度の改修の可能性は非常に低い。そして筆者自身も先日、保健委員長の座を後輩へ引き継いだ。筆者の挑戦は一応ここで終わるが、可能な範囲でこの活動を続けていきたい。そして国立市の皆さんにこの問題を知っていただき、何かの機会でご支援を賜りたいです。

また他校で、より緊急度の高い改修が必要であるとそちらが優先になる。仮に本校に資金が提供されても、トイレのような慢性的な課題よりも雨漏りなどの緊急性の高い課題に優先的に資金が使われ、なかなかトイレ問題に着手されない。そのため今年度、来年度の改修の可能性は非常に低い。そして筆者自身も先日、保健委員長の座を後輩へ引き継いだ。筆者の挑戦は一応ここで終わるが、可能な範囲でこの活動を続けていきたい。そして国立市の皆さんにこの問題を知っていただき、何かの機会でご支援を賜りたいです。



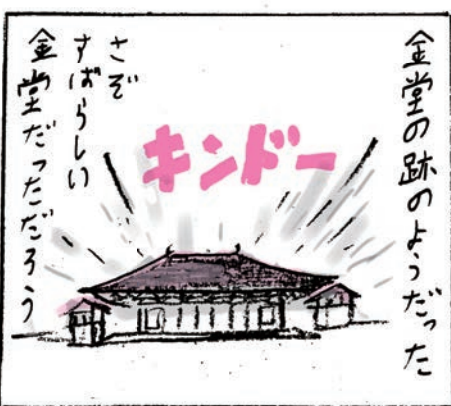
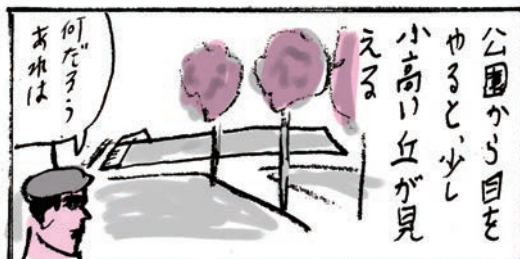
国立高校に通う新聞部の生徒が、自分たちの学生生活を紹介する連載。03号では、自分たちの生活環境改善のために奮闘する様子を生徒の高橋さんが書いてくれた。

たまたま 散歩

第3回

園ヶ寺西元町  
黒鐘公園には

堀道広



CASTでは、まちなかで新しい動きを作る人やそこに参加する人を「CAST」と呼びます。そんなCASTのさまざまな活動をピックアップし紹介する連載。第4回目は○ZINEの編集長を務める「田尾企画 編集室」の田尾圭一郎さんにこれまでの仕事やアートに対する思いなどについてお話を伺いました。

——現代アートの企画やキュレーションを行う傍ら、慶應義塾大学SFCで教鞭を取られていた田尾さんですが、こうした仕事に就かれたきっかけは何ですか？

もともとアート自体は学生の頃から好きだったんです。大学の卒論も「美学」をやっていましたし、それに関連する仕事がいないと思っただけで、広告会社の博報堂に就職しました。やりがいのある充実した仕事でしたが、アートの仕事をしたい気持ちが強くなり、「美術手帖」の編集部に転職しました。そこでアートのことを幅広く学ぶことができました。

そうしたキャリアを歩いてきて今は、アートを社会に広く届け取り入れてもらう「アートの社会実装」をテーマにアートプロジェクトの企画に携わっています。

——仕事の大変さややりがい、おもしろさはどうな感じですか？

まだモヤモヤして言語化できていないことや、可視化されていないことをかたちにするのは楽しいですね。日常を過ごしている「なんでも自分はイラっとしたんだろ」とか「理由はわからないけど」くわくわくする「みたいない感覚」ってありますよね。それを自分の引き出しにストックしておいて溜まってくるとだんだん傾向が見えてきて、言語化ができるようになっていくんです。そのことを人に話したりして「自分もわかるよ」ってなると、人と共有できる意識だっ

たり時代性みたいなものに仮説が固まっていき、展覧会の企画になっていきます。

アートは解釈が自由です。自分のモヤモヤや言葉をアーティストや来場した方と共有すると、それがまた違うものに解釈されイメージがゆたかになっていきます。そういった未知への試行錯誤がキュレーションの楽しさだと思います。

大変さについては、どの業界もそうだと思うのですが、最後にどだけ歯を食いしばれるかだと思います。クリエイティブ系の仕事ってゴールや正解がないじゃないですか、キュレーションとかクリエイティブディレクションって、様々なことを考えたり取りまとめはするけど、実際に作品や展覧会をつくっていくのはアーティストやインストーラーの方です。だから自分が妥協するとまわりも妥協してしまう。自分はその最終防衛ラインだな、という気持ちでやっています。もちろん予算やスケジュールとか色々あるんですけど、そのなかでどれだけ「よりよくなりたい」って思えるかはいつもすごく意識することです。それが大変さでもあり、やりがいでもありますね。

——国立はどんなまちだと思えますか？

等身大になれる場所です。出張に出ていることが多いので、国立にいるときは重い荷物もなくラフな格好でデスクワークをしていることが多いです。学生の頃からいまま

でクリエイティブに関連する人とはかり過ぎてきたので、そうではない子供と過ごしたりママ友やパパ友と話す、新しい世界を見れて新鮮です。

あとは文教地区だからか、勉強をしている人が多いと思います。スターバックスに行くと、たっさんの人が勉強したりオンライン講義を受けたりしてますよね。そういう姿勢を見ると、さぼりもつと頑張らないとな、と刺激になります。

SFCで教えるようになって良かったことは、学生当時のパッションを思い出せたことなんです。普段仕事をしているとスピードが求められるので、自分の経験値のなかで合理的に考えることが多かったのですが、授業の課題や自分の将来で一生懸命悩んでいるから、姿から「もう一回悩もう」「言語化して相手に伝えよう」というエネルギーを教わりました。授業スライドをつくるにあたり現代アートを勉強し直したことも仕事に活きました。この国立にも同じようなパッションを持つ学生がいることは、いい刺激です。

仕事に対するストイックな姿勢やおもしろさ、住んでいるからこの国立の魅力など、様々なお話を伺いました。未だ言語化されていないのを追及する田尾さんが今後、○ZINEでどんなトピックを取り上げるのが楽しみです。



### PROFILE

1984年千葉県生まれ。「田尾企画 編集室」代表。アートの企画・編集・コンサルティング/2006年、国際基督教大学卒業。博報堂を経たのち、美術出版社「美術手帖」ユニットにて企業や自治体とのアートプロジェクトの企画、地域芸術祭の広報支援、雑誌・書籍の編集、展示企画などに携わる。2022年に独立し現在に至る。主なプロジェクトに東京都「都市にひそむミナエイモ」展クリエイティブ・ディレクター、グラングリーン大阪「Everything Lights Everything」キュレーション



インタビューのロングver.を公開中！  
こちらをチェック！

様々なまちを訪れ、気になる活動に取り組みスペースを紹介する「LAND」。今回は漁師町として知られる富山県・氷見市の宿泊施設「HOUSEHOLD」です。“泊まる”だけでなく、料理を通してまちの魅力を体感するハブとしてささやかな時間をゲストに提供しているオーナー・笹倉夫妻に、まちとHOUSEHOLDの在りかたについて聞きました。

## VOL.04 HOUSEHOLD

聞き手=田尾圭一郎 構成=さつま瑠璃



——氷見の日常にある魅力ってどんなものでしょうか？

例えば、人のあたたかさ。移住して来たら近所に仲のいいおじさんがいっぱいだと思いますよ。散歩しているとその辺のおじさんに「何やってるん？」ってRPGみたいに声をかけられる。「とりあえず座れよ」みたいな感じでそのままダラダラ喋るんです。

きつと、家のドアが開いているイメージですかね。この辺は集合住宅がほとんどなので、ドアから一歩中に入るとその人の暮らしがあつて、点というより面でつながっている。漁師さんの家って、言われなくても佇まいでわかるんですよ。干物が外に干してあつたりして、おじさんの暮らしはみ出ちやつてる。

もともと繁華街だから話しかけるのに抵抗がなくてナンパする文化があるのか

も。カウンターの横に座った近所の喫茶店のお客さんをすぐナンパして、そのまま車に乗せて一緒に観光するとか。おじさん側に俺が声かけたら危ないって思われるかな」みたいな感覚がなくて。我々もスタッフもそういうおじさんの話を聞くのが好きなんです。

ひとり親方だろうが地元の社長だろうが個人事業主だろうが、経営者の人とかつて自分で考えて自分で話してますよね。アンテナが外に向いている感じ。RPGのようにそういう探索を楽しむ気持ちを持つてる人のほうが、このまちを楽しめると思います。

——HOUSEHOLDは料理をテーマにしていて、旬の食材が買えるお店や宿での料理を勧めていますよね。チェックインしたときに会話を楽しみながらまちの様々な表情を知ることができたのも印象的でした。

氷見は景色もきれいだけど、曇りが多いエリアでもあるのでそれは必ずしも見られるとは限らないですよ。その点、食べ物是一年を通してゆたかだし、季節の移り変わりも感じられる。近所の人にお魚もらつたり野菜もらつたりとかも日常茶飯事で、料理というテーマだとまちの楽しめかたが広がりやすいんです。



の関わりのおかげで成り立ってる場所、ほかからだけではまったく完結してない。だからこそ、氷見という星座の見方を、「この星とこの星をつなげばこんな面白いかたちになるよ」っていうのをゲストには伝えられるように心がけているんですよ。つなぐ星（お店や人）も、光の強さよりも色のバリエーション（キャラクター）を意識しているかもしれないですね。

ほかにも、まちとの関係性をちゃんと保ちながらやっていきたいんです。顔が見えないところでお金ばかりが生まれたとしても、投資としてはいいのかもしれないけれど自分たちはなんか面白くないんですよ。それだと事業になっちゃう。これからは、同じものを面白がれる仲間を増やしていきたいですね。



### INFORMATION HOUSEHOLD

海辺のビルをリノベーションした、1日3組限定の宿泊施設・飲食店・ギャラリーによる複合施設

ウェブサイト：<https://www.household-bldg.com/>



インタビューはウェブサイトでも公開中！  
こちらをチェック！

## 【ACKT (アクト) について】

ACKTはまちなかで生まれる多様なプログラムを通して、アーティストや市民・市外の参加者と交流をしながら活動し、ともに成長していくためのアートプロジェクトです。「まちを舞台に編まれる芸術と文化」をテーマにしたプログラムやアクションを通じて、新たなまちの価値を生み出していきます。

	【音楽】	【ファッション】	【食】	【展示】	【映画】	【公開制作】	【W.S.】
【農】	■	■	■	■	■	■	■
【空き家・ 空きテナント】	■	■	■	■	■	■	■
【歴史・学び】	■	■	■	■	■	■	■
【子育て】	■	■	■	■	■	■	■
【まちの回遊】	■	■	■	■	■	■	■
【etc.】	■	■	■	■	■	■	■

## 【活動について】

ACKTはひとつのプログラムだけを進めるのではなく、上記の図にあるような社会課題と様々なアートの分野が交わる、【芸術と文化／スペースと人】の交差点をつくりだします。

### 【運営】

【主催】東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、国立市、公益財団法人くたち文化・スポーツ振興財団、一般社団法人ACKT

### 【メールニュース配信】

ACKTの活動に関する最新情報などをメールニュースでお伝えしています。ご興味のある方はぜひご登録ください。

ご登録はこちら



【編集長】田尾圭一郎(田尾企画 編集室)

【デザイン・編集】安藤涼、丸山晶崇

【表紙イラスト】佐久間茜

【執筆】田尾圭一郎、加藤健介、天野陽日、石本千代乃、関口太樹、滝原洸太、山本穂乃、国立高校新聞部

【発行】ACKT(アクト/アートセンタークニタチ) | 令和7(2025)年3月発行

【主催】東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、国立市、

公益財団法人くたち文化・スポーツ振興財団、一般社団法人ACKT

\*「ACKT(アクト/アートセンタークニタチ)」は東京アートポイント計画の一事業として運営しています。

東京都



【東京アートポイント計画について】

東京アートポイント計画は、社会に対して新たな価値観や創造的な活動を生み出すためのさまざまな「アートポイント」をつくるために、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が、地域社会を担うNPOとともに展開している事業です。実験的なアートプロジェクトをとおして、個人が豊かに生きていくための関係づくりや創造的な活動が生まれる仕組みづくりに取り組んでいます。 <https://www.artscouncil-tokyo.jp/>